国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成29年4月1日発行　第41巻第4号通巻第475号

みんぱくは開館40周年を迎えます

月刊みんぱく

2017 4月号

インタビュー

吉田憲司 新館長に聞く

開館40年、これからのみんぱく

太陽の塔 再生
——生命（いのち）の空間がよみがえる

平野（ひらの） 暁臣（あきおみ）

いま太陽の塔の内部を再生するプロジェクトが進行中だ。耐震補強を施した上で塔内を復元／公開する計画で、二〇一八年春のオープンを目指している。

こう話すと、若者たちは一様に驚いた表情を見せる。太陽の塔は知っていても、認識は〝大きな彫刻〟であり、中はドンガラだと考えているのだ。半世紀も封印されてきたのだから、無理もない。

いうまでもないが、太陽の塔は大阪万博テーマ館という「パビリオン」の一部である。内部にはダイナミックで幻想的な展示空間が広がっていた。中心は高さ四五メートルの《生命の樹》だ。

一本の樹体に、単細胞生物から人類まで、進化の歴史をたどる二九二体もの「いきもの」がびっしりと貼りついている。この周りをエスカレーターで上りながら、始原のときから営々とつづく生命の生長と変貌を間近に見ていく、という仕掛けだった。

アメーバは下等で人間が最上級、と訴えているわけではない。逆だ。どんないきものも一本の幹に連なる存在であって、違いなんかない。足元をよく見てみろ、根源を見ろ。そう語りかけている。

地下から天空へと貫いて伸びる生命の時間。根源から立ちのぼり未来へと向かう生命力のダイナミズム。そして生命の尊厳。

岡本太郎の生命観がそのまま形になっている。

塔内は真っ赤だ。当時、太郎は「生命の樹は太陽の塔の〝血流〟だ」と語っていたらしい。動脈、静脈、神経系、リンパの流れ—。そして内壁の赤い襞（ひだ）は〝脳の襞〟〝知の襞〟だ、と。

塔内空間は単なるディスプレイではない。太陽の塔の内臓なのだ。太郎は臓物を内包するいきものとして太陽の塔を構想していたのである。

塔内は廃墟（はいきょ）同然だった。生命の樹は傷み、生物群の多くは失われてしまった。それを丁寧に復元するのだが、機械的に「元通り」にするわけではない。最新の技術を使って、当時の演出意図をより効果的に実現する工夫を凝らすつもりだ。当時やりたくてもできなかったことに挑戦したい。

この再生は、単に「万博の遺構のひとつが復元される」というレベルの話ではない。太陽の塔が内臓を取り戻すということであり、ふたたび生命が吹き込まれるということなのだ。

いよいよ太陽の塔が目を醒ますときが来た。

あのとき岡本太郎が日本社会に問い掛けたもの。それは〝いのち〟だ。太郎のメッセージはいまを生きるぼくたちにきっとまっすぐ届くだろう。太陽の塔が仕事をするのはこれからだ。

プロフィール
1959年東京都生まれ。空間メディアプロデューサー／岡本太郎記念館館長。イベントやディスプレイなど〝空間メディア〟の領域で多彩なプロデュース活動をおこなう。岡本太郎関連では「明日の神話」再生プロジェクト、生誕百年事業などに続いて、太陽の塔の再生プロジェクトにとり組んでいる。『万博の歴史』『大阪万博』『岡本太郎と太陽の塔』（いずれも小学館）ほか著書多数。

月刊 みんぱく

4月号目次

1 エッセイ　千字文
太陽の塔 再生——生命（いのち）の空間がよみがえる
平野 暁臣

2 インタビュー
吉田憲司新館長に聞く
開館40年、これからのみんぱく

10 ○○してみました世界のフィールド
第二の家族　ウィン一家
深川 宏樹

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
半人半魚の女神たち
山中 由里子

16 新世紀ミュージアム
カナダ歴史博物館
岸上 伸啓

18 手芸考
工芸館所蔵の「手芸的」なもの
木田 拓也

20 ながなんぢゃ
「フェイクニュース」としてのキラキラネーム
小林 康正

21 次号予告・編集後記

喪明けの儀礼ボナで、森から村に向かうかぶりもの型の仮面「ニャウ・ヨレンバ」
カリザ村、ザンビア。2000年撮影

インタビュー

吉田憲司新館長に聞く 開館40年、これからのみんぱく

この4月より、吉田憲司教授が6代目館長に就任しました。館内からの就任は、3代目館長の石毛直道名誉教授以来、14年ぶりとなります。吉田先生のこれまでの歩みや、今年で開館40周年を迎えるみんぱくの今後の展望などをうかがいました。

（聞き手＝丹羽典生（にわのりお）
本誌編集長・超域フィールド科学研究部）

吉田 憲司（よしだ けんじ）

経歴（※は受賞歴）
一九八〇年 京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒
一九八七年 大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得満期退学
大阪大学文学部助手
一九八八年 国立民族学博物館助手
一九八九年 学術博士（大阪大学大学院文学研究科）
［学位論文］『チュワ社会における仮面と変身信仰の研究』
一九九二年 国立民族学博物館助教授
一九九三年 第五回日本アフリカ学会研究奨励賞受賞（※）
二〇〇〇年 国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任
第二二回サントリー学芸賞受賞（芸術・文学部門）（※）
二〇〇四年 第一回木村重信民族藝術学会賞受賞（※）
二〇〇六年 国立民族学博物館文化資源研究センター教授・同センター長
二〇一五年 国立民族学博物館副館長
二〇一七年 国立民族学博物館館長

主要著書
一九九二年『仮面の森――アフリカ、チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』講談社
一九九九年『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店（二〇一四年再版）
二〇一三年『文化の「肖像」――ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店
二〇一四年『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』岩波書店
二〇一六年『仮面の世界をさぐる――アフリカとミュージアムの往還』臨川書店

二足のわらじをはいて

大学時代は文学部哲学科に在籍されていましたが、当時から文化人類学・民族学への関心はあったのでしょうか。

吉田　京都大学に入学した当初から関心はありました。しかし、当時、京大には文化人類学を専攻できる講座がなかった。人類学を学びたい者の多くは社会学の講座に進みましたが、わたし自身はもともとモノや芸術に関心があったので、美学美術史学の講座を選びました。教授の吉岡健二郎先生はカントやフィードラーの、助教授の清水善三先生は平安彫刻史の専門家で、その講座自体に人類学との接点はありませんでした。

ですから、文化人類学は、正規の講義ではなく、半ば独学で学んだようなところがあります。梅棹忠夫さんがみんぱくに移られたあと、米山俊直さん（京都大学・当時）が面倒をみておられた、近衛ロンドという毎週水曜日の自主サークルや、谷泰さんが主宰しておられた京都大学人文科学研究所の社会人類学の共同研究に参加して、人類学の知識を吸収していきました。

フィールドワークに関していえば、大学に入ったあと、すぐに探検部に入部して、見よう見まねで山村調査を始めました。はじめての調査地に選んだのが、長野県下伊那郡（しもいな）の遠山郷下栗（とおやまごうしもぐり）です。霜月神楽という仮面の芸能を伝えている、南アルプスを望む山上の村です。この下栗には、昨年、四〇年ぶりに足を運びました。

アフリカへの関心も、このころからあったのでしょうか。

吉田　海外へのあこがれはすでにありました。探検部のプロジェクトとして、インドから喜望峰まで自動車で踏破するという計画を立てたのですが、先輩のところに相談に行くなかで、福井勝義さん（民博・当時）に相談したところ、「君たちはアホですか？　車で走るだけで何になる！」と言われてしまいました。「それよりも、一九七二年に第一次内戦が終わったスーダン南部に行かないか」と福井さんから誘われ、即座に「行きます」と答えたのが、アフリカとのつながりのきっかけです。

一九七八から七九年にかけて、休学し、今から思えば大時代的な「上ナイル踏査隊」という名の隊を組織して、スーダン南部に行きました。このとき、行をともにしたのが、栗本英世さん（現・大阪大学）と重田眞義さん（現・京都大学）です。半農半牧の生業を営むパリという集団の村に滞在したあと、仮面をもっているコミュニティに入るつもりだったのですが、途中でマラリアにかかってしまい、結局自分が行きたかったフィールドでは調査ができず、帰国の日を迎えました。アフリカでの仮面の調査は懸案となってしまったのです。復学しましたが、そのまま京大の美学美術史学の講座でアフリカの仮面の研究を続けるのは難しいと判断し、京大を離れることにしました。

パリの男たちによる大巻狩の朝。朝日に槍の穂先が光る。ラフォン、南部スーダン、1979年撮影

大学院は大阪大学へ進学されたのですね。

吉田　そうです。当時、日本で唯一、先史美術や現代美術といった、いわゆる美術史学に収まらない分野の芸術現象の研究をしておられた木村重信先生の門をたたいたのです。所属は西洋美術史講座ですが、そこでわたしはアフリカの仮面の造形や儀礼についての研究に取り組みました。大学院博士課程のときには、仮面結社をもつザンビアでのチェワの人びとの村で二年間のフィールドワー

クに従事しました。一年以上、辛抱強く待ち続けたすえに、ニャウとよばれる仮面結社のメンバーになることを許され、以来、結社の内側から仮面の世界をみることができるようになりました。チェワの人びととの付き合いは、今も続いています。

大阪大学では、そのまま西洋美術史の講座におられたのですか。

吉田　助手を終えるまで、西洋美術史の研究室に所属していました。ですから、最初からずっと二足のわらじをはいていたことになります。長いあいだ、人類学と美術史学、民族学博物館と美術館のあいだにはまったく交渉がなく、壁で隔てられてきたというようなところがありますが、わたし自身はいつもその両方を横断するかたちで研究を進めてきました。

村入りから1年以上、村人から借りた畑を耕すだけの日々が続いた。
カリザ村、ザンビア。1984年撮影

一九八八年にみんぱくに着任してからも、そのような視点や問題意識に基づいた展覧会を企画されました。

吉田　はじめて企画したのは、一九九〇年の「赤道アフリカの仮面――秘められた森の精霊たち」でした。そのあと、「異文化へのまなざし――大英博物館コレクションにさぐる」（一九九七年）、「アジアとヨーロッパの肖像」（二〇〇八年）、そして「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」（二〇一四年）など、美術館と博物館における文化表象のあり方や、そこに潜むまなざしをさぐるような一連の展示を企画しました。美術史学と人類学、美術館と博物館。わたし自身の仕事は、一貫して、そのあいだに築かれた壁を乗り越える作業であったように思います。

上：特別展「異文化へのまなざし――大英博物館コレクションにさぐる」。100年前の大英博物館の民族誌ギャラリーを再現した。1997年。撮影・千里文化財団
下：「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」の展示風景。国立新美術館にて、2014年

より開かれたみんぱくに

先生のみんぱくとのかかわりについてお聞かせください。

吉田　みんぱくとは、開館前からのつきあいがあります。かつて、谷口財団の支援による国際シンポジウムがさまざまな学問分野で開催され、そのうちの民族学部門と文明学部門がみんぱくでおこなわれていました。一九七七年九月、民族学部門の第一回「東アフリカ牧畜民のあいだの部族間関係――戦争と平和」が開催されました。福井勝義さんが主宰され、京大の学生だったわたしは、アルバイトでその準備の手伝いのために開館直前のみんぱくに通って来ていました。また、一九八三年より始まった文明学部門の最終回である、「近代世界における日本文明――収集と表象」（第一七回、一九九八年）では、奇しくもわたしが主宰の任をつとめました。何か、深いご縁を感じます。

さらにさかのぼると、七〇年の万博のときには、お祭り広場でおこなわれた日本中のボーイスカウトによる手旗信号ショーに出演しました。中学三年生だったわたしは、ボーイスカウトに入っていたのです。そのときは、まさか将来、万博の跡地で働くとは思ってもいませんでした。

大学や研究機関における人文社会科学のあり方が、国内外で問われている印象があります。研究機関としてのみんぱくの展望はいかがでしょうか。

吉田　みんぱくは、いろんな世界一をもっていると思うのです。世界第一級の規模の博物館と大学共同利用機能をもつ文化人類学・民族学の研究所として、世界で唯一の存在です。みんぱくは今や三四万点という標本資料のコレクションをもっていますが、このコレクションは、二〇世紀後半以降に築かれた民族誌資料（標本資料）のコレクションでは世界最大規模のものです。国内では、世界全体をカバーできる研究組織、研究者の陣容をもっている唯一の研究機関です。こうした「オンリーワン性」を、今まで以上に、最大限に発揮し、活性化させていきたいと思っています。そうすれば、今の人文系に対する圧力などはそれほど気にすることはないだろうと思っています。国の意向がどうであれ、分野を問わず、日本の研究者や組織が海外へ出ていく際には、異文化理解や世界に対する認識がいちばんベースになるでしょうから。

しかし、世界一といいながら、情報発信の面では、これまでのところ不十分な面もみられます。人類の文化遺産、文化資源とその情報の世界的な集積拠点として、国際的にもっと発信していく責任があるでしょう。データベースの英語化、現地語表記も含めた複数言語化は、まっさきにとりかからなければならない課題です。

丹羽典生編集長（左）と吉田憲司館長。撮影・千里文化財団

これからのみんぱくの展示のありかたはどのようになっていくのでしょうか。

吉田　わたしはみんぱくの創設二〇周年記念シンポジウム「二一世紀の民族学と博物館――異文化をいかに提示するか」（二〇〇四年）で、コーディネーターをつとめました。その場で美術史家のダンカン・キャメロンが提唱した「フォーラムとしてのミュージアム」という考え方を紹介しました。「フォーラムとしてのミュージアム」というのは、そこで人と人、人とモノが出会い、そこから議論や活動が広がっていく場としての博物館という考え方です。その理念は、みんぱくの本館展示のリニューアルのもととなった「展示基本構想二〇〇七」にも盛り込まれましたし、世界的な博物館の潮流にもなってきたと思います。

ただ、この考え方は、人類学にも当てはまることだと思います。われわれ人類学者が人びとから情報をもらって、それをもとに文化を語るという作業をしている以上、そもそも人類学の営み自体がフォーラムでなければなりたちません。ですから、「フォーラム」というのは、博物館のあり方と同時に、人類学の研究のあり方についてのひとつのビジョンになるだろうと思っています。今みんぱくが進めている「フォーラム型情報ミュージアム」のプロジェクトも、その考え方の延長線上にあります。それは、たんなる博物館の情報発信の強化ではなく、みんぱくのもつ資料情報を、国内外の研究者をはじめ、その「資料」をもともと作り、

使っていた人びと、つまりソース・コミュニティの人びとと共有し、ともに育て、ともに活用していこうというプロジェクトです。それは、結果的に、みんぱくの研究の国際化や、世界的な研究ネットワークの構築にもつながるはずです。

今年三月に、本館展示のリニューアルが完了しました。

吉田　一〇年がかりでようやく完了しました。ただ、展示というものは空間が固定されていて、展示場で提供できる情報はごくわずかです。一方で、それを作り上げていく過程で大量の情報が集まり、今も集まってきています。これから計画しているのは、この展示を糸口とした、情報提供の高度化の事業です。

そのひとつが、次世代の電子ガイドの開発と導入です。携帯端末に展示資料の情報を提供するだけでなく、観覧者の関心にあわせて電子端末が展示場のコースを誘導してくれるようなシステムを開発すべく、企業と共同で研究をおこなっています。

あわせてビデオテークのシステムも一新します。展示場で見たものや関心をもったものが携帯端末に記録され、ビデオテークブースで関連情報がどんどん引き出せるというような、電子ガイドとビデオテークが連動するシステムの導入をはかりたいと思っています。

ただ、大阪から遠く離れた方々は、みんぱくへの来館がなかなか難しい。そこで、パソコンのモニター上で展示場をめぐれるようにするバーチャルミュージアムの製作も進めています。全展示場のパノラマムービー化はすでに終えました。そこにビデオテークの番組情報など、展示場で提供する情報コンテンツのほか、研究で蓄積された情報のコンテンツを組み込み、インターネットを通じて配信します。とはいえ、ネット配信に制限のあるコンテンツもありますから、そうしたものは、ポータブル型のビデオテークに実装して、大学等へ貸し出すことを考えています。

リニューアルされたみんぱく本館展示のアフリカ展示場。「祈る」のセクションに並ぶチェワのかぶりもの型の仮面「ニャウ・ヨレンバ」は、自ら制作したもの。2009年3月。撮影・千里文化財団

「ニャウ・ヨレンバ」の制作風景。左が吉田館長。1990年。撮影・千里文化財団

研究、展示に加えて、三つ目のみんぱくの役割として教育があります。

吉田　ポータブルのビデオテークシステムを貸し出すというのも、大学教育への貢献のためです。すでに、ビデオテークの番組をすべて収録した試作機はできていて、その貸出はすぐにでも始めたいと思っています。そこにさきほどの新しいビデオテークシステムに搭載しようとしている最新の研究情報を盛り込んでいくと、大学の研究室でみんぱくが蓄積してきた情報を活用していただけるようになります。講義にも研究にも使ってもらえる。これにより、大学共同利用機関としての役割をより高めていければと思います。

「フォーラムとしての博物館」という概念からいうと、みんぱくを社会に対しできるだけ開いていきたいと思います。総合研究大学院大学の基盤機関として教育活動だけでなく、他の大学の大学院との単位互換や連携を進めたいと考えています。また、アウトリーチの活動も、もっと積極的に展開していきたいと考えています。二〇一四年から始まった大阪・梅田のナレッジキャピタルでの連続講座は、いままでにない層のお客さんが開拓できていると思います。友の会やMMPの一層の活性化にも力を注ぎたいと思っています。

東京・国立新美術館との共催で開催した「イメージの力」展の巡回では、手応えを覚えました。特に国立新美術館での開催では、独自企画としては同館で過去最高の入場者数を数えましたし、その後も、国内各地での巡回が続いています。この「イメージの力」展に限らず、これからも巡回展を積極的に続けていくことで、大阪にとどまらずに、活動の場を広げていくと同時に、国内外の博物館のネットワークの強化にもつなげていきたいと考えています。

長男・吉田淳一朗の訪問を機に催されたニャウの踊りの場に、ほぼすべての村の女性が集まったときの貴重な写真。カリザ村、ザンビア。2009年撮影

みんなの夢が実現できる場所へ

吉田先生ご自身の今後の研究のご予定はいかがでしょう。

吉田　これからは、なかなかフィールドには行けないかもしれませんが、館長職に支障の無いことを前提に、フィールドワークはぜひとも続けていきたいとひそかに願っています。

一九八四年の最初の訪問以来、ずっと調査してきたチェワの人びとの秘密結社の仮面舞踊が、二〇〇五年にユネスコの無形文化遺産に指定されたことが契機になり、あらたな現象が起こっています。現在、チェワの人びとはザンビア、モザンビーク、マラウイにまたがって住んでいるのですが、ザンビアでおこなわれたチェワの祭りに、二〇〇七年、三国の大統領がそれぞれの国のチェワのチーフたちとともに参列したのです。さらに、祭りのなかで、ザンビアのチェワの王に対して、それぞれの国のチェワのチーフが、自分の地域のニャウの仮面舞踊を奉納したのです。この祭りは、もともとはザンビアに暮らすチェワが「伝統を始めよう」というスローガンのもとに、民族全体の祭りとして一九八四年に始めたものです。これまで、モザンビークに住むチェワもマラウイのチェワも、それぞれにチーフをいただいていて、ザンビアにおけるチェワの王がチェワという民族全体の王様であるという認識をもってはいませんでした。しかし、このできごとをきっかけに、チェワの人び

王ガワ・ウンディの前で舞踊を披露するニャウの踊り手「マカンジャ」。ザンビア、ムカイカ村にて。2007年撮影

との思いに変化が起き始めているようです。しばらくは、この集団のアイデンティティの変化のプロセスを追いかけていきたいと思っています。

南部アフリカの聖霊教会の聖霊憑依（ひょう）や病気治しの儀礼についても、三年前、本にまとめた以降の展開を追いかけていきたいと思っています。その英語版の出版もひかえています。

また、みんぱくが収蔵している仮面資料についても、内外から展覧会や貸出などの需要が頻繁にありますので、一冊の本にまとめるなど、わたしが退職するまでに整理しておきたいと考えています。

みんぱくは今年四〇周年という節目を迎えます。関連する催しについて教えてください。

吉田　一九七七年一一月一七日に開館しましたので、それに近い一一月一日に関係者の方がたに集まっていただいて、開館四〇周年記念式典をおこないます。その場を展示場のお披露目、生まれ変わったみんぱくをみなさんにあらためて見ていただくような機会にしたいと思っています。また、特別展「ビーズ」を皮切りに、さまざまな特別展や企画展も予定しています。二〇一八年三月には、太陽の塔の改修工事が終わりますので、万博と民博をつなぐような特別展を実施する予定です。

最後に、吉田先生にとって、みんぱくとはどのような場所なのでしょうか。

我が家の前で、アシスタントのヨセフ・ビリと。カリザ村、ザンビア。2011年撮影

吉田　わたしにとって、みんぱくは何よりもまず夢が実現できる場所でした。展覧会や共同研究、国際シンポジウムなど、やりたいことはすべて実現させてもらったという思いがあります。その思いは、今もむかしも変わりません。これからのみんぱくも、誰にとっても、夢が実現できる場所であってほしい。そして、そういう場にしたいと思います。

それから、もうひとつ。わたしにとって、みんぱくは、やはりフォーラムとしてのミュージアム、フォーラムとしての研究活動の実現の場、といえると思います。観覧者や利用者も含めて、人びとがここで出会い、そこからあらたなものを生み出していける場、そのような場としてのみんぱくを皆さんとともに作っていきたいと考えています。

国立民族学博物館 開館四〇周年記念事業

展示

小・中学生の本館展示・特別展示の観覧無料化
2017年4月1日[土]～

特別展
「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」
2017年3月9日[木]～6月6日[火]

特別展
「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」
2017年8月10日[木]～10月10日[火]

企画展
「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」
2017年9月7日[木]～12月5日[火]

開館四〇周年記念特別展（企画立案中）
2018年3月～予定

刊行物

『国立民族学博物館展示案内』
2017年10月末発行予定

国立民族学博物館友の会

「みんぱく大集合」
2017年11月4日[土]

新館長の横顔

吉田先生の意外な一面に迫ります。

（聞き手＝山中由里子（やまなかゆりこ）　本誌編集委員・学術資源研究開発センター）

Q　子どものころの夢は？

原子力船を作りたい

当時、原子力船は夢の技術でした。その後、建築の歴史に興味をもつようになり、大学では、工学部建築科を志望していましたが、入試で失敗しました。翌年、柳田国男の全集に出会ったのをきっかけに、進路を文学部に変えました。

Q　コスプレをするとしたら？

月光仮面

子どものころの自分なら、ヒーローもの、特に月光仮面になりたいと言っていたのではないでしょうか。現在の仮面研究にもつながっているのかも。

Q　好きな芸術作品は？

渡岸寺の十一面観音立像（滋賀県長浜市）

仏像が仮面研究の原点かもしれません。仏像への興味から出発して、徐々に静的にたたずむ造形よりも、人間の身体に装着してダイナミックに躍動する仮面という造形に魅力を感じるようになったように思います。

Q　対談してみたい歴史上の人物は？

司馬遼太郎と上杉謙信

司馬遼太郎と対談してみたいというのは、彼の文明観を聞いてみたかったからです。また、わたしは歴史小説が好きで、海音寺潮五郎作の『天と地と』にのめりこんだ時期があり、越後の各地も歩き回りました。会えるというなら上杉謙信という人物には、会ってみたいと思います。

Q　好きな映画は？

『スターウォーズ』

第一作（エピソード4）は映画館でだけでも四回くらい見ました。『スターウォーズ』は人間にとっての異界をあらわしていて、自分の研究対象や関心にもつながっているようです。

Q　生まれ変わるとしたら？

霊長類学の研究者か犬

霊長類学には今でも関心があります。もうひとつ、長年犬と一緒に暮らしてきたので、普段犬が何を考えているのか体験してみたいという気持ちもあります。

○○してみました世界のフィールド

第二の家族　ウィン一家

深川（ふかがわ） 宏樹（ひろき）
日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学）

パプアニューギニアで長期調査を始めたころ、身ひとつで飛び込んだわたしを温かく受け入れてくれるクラン（氏族）に出会った。彼らとともに過ごした濃密な二年間は今でも心の糧となっている。

有袋類の毛皮で作られた伝統的な帽子をかぶった著者

出会いは偶然

「じゃあ、家（うち）に来てみないか？　一年でも二年でも居たらいい」。バス停で会った四〇代の男性ウィンは、こともなげに、そう言った。わたしたちはまだ二言三言しか、ことばを交わしていなかったように思う。当時、わたしはニューギニア高地エンガ州で長期調査をおこなう村落を探していた。わたしを含め、人類学者はある奇妙な信仰をもっている。例えばニューギニア高地のように、人類学のフィールドとなるような地域、なかでも「田舎」では、身ひとつで飛び込めば、なんとか人びとに受け入れられ、長期のフィールドワークをおこなうことができる、というものだ。根底の部分における、人間への信頼とでもいえようか。わたしもそうした期待をもって、エンガ州に身ひとつで飛び込み、たまたまバス停で一緒になった男と、そしてその家族たちと、二年近くにわたって濃密な日々を過ごすことになった。その出会いは偶然だったが、ともに暮らした日々は、今でもわたしの人生の最良の部分をなしている。

ニューギニア高地エンガ州の村落風景

クランの一員になる？

先ほど「家族」と書いたが、これは正確な表現ではない。確かにわたしはウィンの家族（ウィンとその妻の三〇代女性サローン、その五歳の息子と三歳の娘にくわえて、六〇代に達するウィンの父母）と暮らしたのだが、そもそもわたしが住んだM村の村人たちは、皆がウィンの親族であった。エンガ州の人びとは、人類学で父系クラン（氏族）とよばれる親族集団のまとまりのなかで暮らす。クランを単位として村落が形成され、土地が所有される。その土地で、人びとは畑を耕し、サツマイモやバナナ、サトウキビを植え、豚を育てて、家を建てる。M村はヤカエマデン・クラン（人口三〇〇人程）の居住村であり、M村で暮らすことは、すなわち、そのヤカエマデン・クランの一員として暮らすことだったのだ。

具体的には、誰かが家屋を建てるのであれば森から木材を切り出して提供し、畑を共同で開墾（こんだん）し、自分の豚を屠（ほふ）っては仲間たちにふるまい、他のクランの男性らとの喧嘩ともなれば加勢し……といった勇ましい話はない。貧弱なわたしは、ぬかるんだ泥道に足をとられては肩を貸してもらい、サツマイモ畑の耕し方から薪の運び方まで一から教えてもらう毎日だった。自分でもとんだお荷物だったと思うが、彼らはそれでもわたしを温かく迎え入れ、「お前はヤカエマデン（の一員）だ。他クランの奴らから『お前はどこから来たんだ？』と尋ねられたら、『日本出身だ』と言うなよ。『M村出身だ』と言え！」といつも笑いながら声をかけてくれた。そんな笑いに包まれながら、毎日一緒に食事をし、現地語を学び、野良仕事についてまわり、村の話し合いに参加する、といった生活を続けていくなかで、多少なりともわたしはクランの一員らしくなっていった。と、願いたい。

クランの土地に作られたサツマイモ畑

家屋の柱を作るために集まった男性たち

パプアニューギニア
エンガ州

「ヤカエマデン・ヒロキ！」

そんなわたしでも唯一、クランの人びとの生活に貢献できるものがあった。それは男女の結婚に際して夫方から妻方に贈られる婚資への現金の供出である。といっても貧乏学生であったわたしはさほどの貢献はできなかったが、それでもヤカエマデン・クランの男性が婚資を支払う際には、必ずその場に赴いて現金を供出した。婚資に現金を供出した者は誰でも、妻方からお返しに貰（もら）える豚肉の分配にあずかれる。豚肉の分配は、村落の広場でおこなわれ、分配者は広場の中央に立って、豚肉を頭上にかかげて、大勢の人びとの前で婚資に現金を供出した者の名前を一人ずつ呼び上げてゆく。わたしも毎回「ヤカエマデン・ヒロキ！　ヒロキ！　ヒロキ！」と呼ばれる度に、豚肉を受けとりに小走りで広場の中央へとむかった。外国人がその場に居合わせることの珍妙さからか、あるいはわたしの走り方が滑稽（こっけい）だったからか、わたしに豚肉が分配されるときには、いつも笑いが巻き起こった。

わたしは彼らのことばに甘えて「現地の人のようになれた」と無邪気に主張するつもりはないし、彼らと真にわかり合えたといえるほどに楽観主義者でもない。だが、わたしのような者でも温かく受け入れる懐の深さが彼らのクランにはあった。それだけは確かなことである。

夫方から妻方に婚資の豚を贈る場面

みんぱく Information

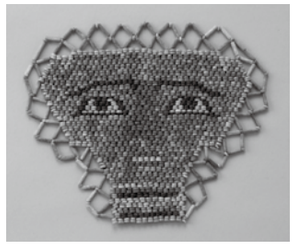
開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」

飾り玉、数珠玉、トンボ玉などを総称するビーズ。本展示では、私たち人類がつくり出した最高の傑作品の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをとおして日本や世界の人びとにとってのビーズの魅力を紹介します。

体験コーナー
ダチョウの卵の殻でできたビーズのアクセサリーなどをさわったり、タカラガイなどの自然素材をビーズとしてつなげたりする体験ができます。

日時　特別展会期中
会場　特別展示館2階
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

会期　6月6日(火)まで
会場　特別展示館


ミイラのビーズマスク（エジプト）

企画展「津波を越えて生きる――大槌町の奮闘の記録」

大槌町の被災前の文化を紹介すると同時に、被災直後の人びとの行動や復旧の試みを展示の形でたどります。

会期　4月11日(火)まで
会場　本館企画展示場

大槌まつりの手踊り隊

みんぱく春の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

春の遠足・校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時　4月4日(火)、6日(木)14時～16時30分
会場　本館第5セミナー室ほか
※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館 案内所
電話　06・6878・8341
Fax　06・6878・8441

連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル――世界のビーズ」

特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」に関連した連続講座を行います。ビーズは、およそ10万年前にはじめてつくられたといわれ、世界各地にみられるものです。今回は、みんぱくのフィールドワーカーによって語られるビーズと人とのかかわりについて具体的に紹介します（全4回）。

時間　19時～20時30分（18時30分開場）
会場　グランフロント大阪北館1階 ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円（1ドリンク付き）、定員各回50名
主催　国立民族学博物館 一般社団法人ナレッジキャピタル

4月12日(水)
世界はビーズでつながっている
講師　池谷和信（本館 教授）

4月19日(水)
台湾のビーズ
講師　野林厚志（本館 教授）

お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

カレッジシアター「地球探究紀行」

開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分（12地域）ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。

時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費1000円、定員各回50名
主催　産経新聞社
共催　近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

4月12日(水)
南太平洋の文化遺産――宣教師ブラウンとそのコレクション
講師　林勲男（本館 教授）

4月19日(水)
太平洋の探検家――朝枝利男の探検と生涯
講師　丹羽典生（本館 准教授）

お申し込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」の会期中に運行します。

運行日　6月6日(火)までの土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日、5月13日(土)、14日(日)、20日(土)、21日(日)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

大阪モノレール 万博記念公園駅発

時	万博記念公園駅→国立民族学博物館
10	06　36
11	06　36
12	46
13	16　46
14	26　56
15	26　56
16	
17	

国立民族学博物館発

時	国立民族学博物館→万博記念公園駅
10	50
11	20
12	30
13	00　30
14	10　40
15	10　40
16	30
17	00

●小・中学生の観覧無料化について

開館40周年を記念し、4月1日(土)より中学生以下は観覧料が無料となります。
※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

研究部の改組について
2017年4月1日より、総合的研究力の強化及び学術資源の研究開発力の強化のため研究組織を変更いたします。従来の3研究部2センターに代わり、人類基礎理論研究部、超域フィールド科学研究部、人類文明誌研究部、グローバル現象研究部、学術資源研究開発センター及び国際研究統括室を設置します。

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第467回4月15日(土)
エジプトでイスラーム思想のテクストを読む
講師　相島葉月（本館 准教授）
思想研究の主たるアプローチはテクスト分析ですが、著者の手を離れた後、テクストの意味は誰のモノになるのでしょうか。エジプトの事例より思想研究への人類学的アプローチを検討します。

エジプト人思想家 アブドゥルハリーム・マフムード（1910―78）

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

4月2日(日)14時30分～15時15分　特別展示館
身近な素材、貴重な素材――台湾原住民族のビーズの多様性
話者　野林厚志（本館 教授）

4月9日(日)14時30分～15時　特別展示館
北アメリカ先住民とアイヌのガラスビーズ利用
話者　齋藤玲子（本館 准教授）

4月16日(日)14時30分～15時　特別展示館
世界のビーズ、日本のビーズ
話者　池谷和信（本館 教授）

4月23日(日)14時30分～15時15分　本館ナビひろば
民博の展示資料を守る
話者　日髙真吾（本館 准教授）

4月30日(日)14時30分～15時15分　本館ナビひろば
「異教徒の地」と「光の地」――パキスタン・アフガニスタンのカタ人とカラーシャ人
話者　吉岡乾（本館 助教）

刊行物紹介

■小長谷有紀 著
『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫――アーカイブズの山を登る』
ミネルヴァ書房　2,800円（税別）

みんぱくには、初代館長梅棹忠夫が残した膨大な資料集積である梅棹アーカイブズが存在する。本書では、「ウメサオタダオ展」の実行委員長を務めた著者が、梅棹忠夫自身とも言えるアーカイブズから、生身の梅棹忠夫を浮かび上がらせる。

■関雄二 編
『アンデス文明――神殿から読み取る権力の世界』
臨川書店　7,900円（税別）

古代文化興亡の地、アンデス。その文明形成期における権力生成の過程を探求する。日本調査団独自の画期的な仮説として1998年に提示された「神殿更新」説の流れを汲みながら、のこされた課題を克服するため、分野横断的に展開された最新の研究成果を発表する。

■池谷和信 編
『ビーズ――つなぐ・かざる・みせる』
国立民族学博物館　1,100円（税別）

開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」の図録。本書では、ビーズの誕生から現代までの10万年という歴史、日本を含めた地球の隅々までの空間を視野に入れて、素材も見た目も多種多様な世界各地のビーズを紹介する。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）

会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員無料（会員証提示）、一般500円

第466回　5月6日(土)13時30分～14時40分
【手話言語学研究部門プロジェクト関連】
第二言語としての日本手話――実感・体感的手話言語案内
講師　飯泉菜穂子（本館 特任教授）
手話言語は音声言語とは異なる音素・語彙・文法をもつ独立した言語です。音声言語が耳で聞き口で話すことばなら、手話言語はいわば「目で聞き手で話す」ことばと言い換えることができるかもしれません。私たちの暮らす日本で使用されている「日本手話」はどんな言語で、どんな人たちが話し、その人たちはどんな文化を持っているのでしょう。第二言語として手話を習得してきた私の体験を交えながら分かりやすくお話しします。

第467回　6月3日(土)13時30分～14時40分
《みんぱく名誉教授シリーズ》がスタート
人類史のなかの遊牧
講師　松原正毅（本館 名誉教授）

東京講演会

第118回　5月13日(土)13時30分～14時40分
【第89回民族学研修の旅関連】
モンゴル高原における遊牧民の遺産
講師　小長谷有紀（人間文化研究機構 理事、本館併任教授）
会場　モンベル御徒町店4Fサロン
モンゴル高原では古来、匈奴・鮮卑・突厥など、様々な民族が主役の座を交代しながら、遊牧文明が維持されてきました。遊牧とは、乾燥した気候にあわせて動物を多角的に利用する生活であり、移動によって随時、自然や社会の変化に対応する柔軟性を備えています。モンゴル遊牧民は、そうした生活の知恵や移動精神を、現在に受け継ぐ人びとです。馬に乗って草原を駆け、平和構築に励んだ遊牧民の暮らしを、各地に遺る史跡を手がかりに考えます。
※要事前申込（定員60名）、会員無料、一般500円

民族学研修の旅
第89回「モンゴル、遊牧の民で出会う」（8月実施）は好評につき定員となりました。キャンセル待ちでのみ受付しております。

想像界の生物相

半人半魚の女神たち

民博 学術資源研究開発センター　山中 由里子（やまなか ゆりこ）

H0068139

H0227851

H0237049

資料名	豊漁祈願舞踊用仮面（人魚）
標本番号	H0068139
地域	メキシコ
サイズ	高さ 8.5 ×幅 20 ×奥行 30

資料名	石彫像（セドナ）
標本番号	H0227851
地域	カナダ
サイズ	高さ 39 ×幅 73 ×奥行 29

資料名	絵画「セイレーンと蛇」
標本番号	H0237049
地域	コンゴ
サイズ	縦 47 ×横 102 ×厚さ 2.6

※サイズの単位はセンチメートルです

◆◆◆ 人間が創る不可思議な生物 ◆◆◆

我々が属する現生人類ホモ・サピエンス・サピエンスは、心の眼で見た心的な像を、眼に見える、手で触れることができる物質で描き出すという力を進化の過程で身につけた。この能力を駆使してヒトは、半人半獣の「ライオンマン」からゴジラまで、さまざまな怪物や幻獣を想像してきた。これら想像界の生物たちは、人間が自らをとりまく世界を理解し、身に危険をおよぼす脅威や眼に見えない世界の力に対する恐れや畏敬の念を対象化し、ときに操ろうとする行為と深く結びついてきたものであった。

このコーナーでは、民博の所蔵資料の紹介をとおして、世界のさまざまな地域の人びとが、不可思議な生き物、あるいは人知を超越する存在をどのように思い描いてきたのかをみてゆく。特に、実在の生物を合成したり、擬人化したり、歪形（わいけい）化した表象が生み出されるプロセスと、その背景にある自然認識や宗教観、さらに生態系と人間の営みの相関関係について考えてみたい。第一回目にとりあげるのは人魚。特に、水にかかわる土着の信仰が、ヨーロッパから入ってきた人魚イメージと出会って創造されたモノを紹介しよう。

◆◆◆ 水の精と人魚像 ◆◆◆

まずはメキシコ、ゲレロ州バルサス河付近のナワの人びとが豊漁を願う芸能の際に使ったとされる銅製打ち出し細工の仮面である。笑っている女性の顔が水の流れのように波打つ髪の中心にあり、その周りを反時計回りに魚の尾がとり巻いている。メキシコのインディオ文化の研究者でありコレクターであった故ドナルド・コードリーの収集品の一部であった貴重な資料である。魚を支配するワニや精霊をなだめて漁をするという筋書きの魚のダンスで使われたとされる。スペイン人がアメリカ大陸に来る前から人魚の表象があったという証拠は今のところないそうだが、グアテマラのマヤ系先住民族のなかには水の女神が半人半魚の人魚であると信じる人びともいるとする研究もある。

同じアメリカ大陸の極北圏に住むイヌイットのアーティストたちは、古くから語られてきた神話や伝承を、二〇世紀半ばごろから版画や彫刻の媒体で表現するようになった。彼らはセドナ（タレーラユなど、地域によって呼び名は異なる）という、アザラシやセイウチなど海棲（かいせい）哺乳類を支配する女神を人魚の姿で描く。デイビッド・ルーベン・ペックトウクンによるソープストーンの石彫作品では、人間の頭に魚の尾、さらにアザラシのひれの要素が組み合わさっている。イヌイットのあいだでは動物や人間に宿る霊魂は同じものであり、人間が動物に変身でき、その逆も起こると考えられている。変身の概念は古くから伝わるものであるが、人魚の姿で水の神を描くというのは、やはりヨーロッパのマーメイド像の影響なのであろう。

最後に、コンゴのアーティスト、ウィンジが描いたかなり色っぽい人魚には蛇が巻きつき、なぜか腕時計、ネックレスをして電話でお話をしている。西・中央アフリカ、カリブ海域で信仰される「マミ・ワタ」（マミ・ウォーター）（「水の母」が土着化したことば）とよばれる水の精がこのように描かれることが多い。マミ・ワタの祭壇に捧げられる種々の消費財が絵に描き込まれ、蛇はマミ・ワタの予知能力を象徴するという。時計、ネックレス、電話はマミ・ワタを喜ばせるアイテムなのだろう。西洋的な人魚像がベースになっているが、信仰形態は混交的なものである。マミ・ワタ信仰が、人魚に見間違われてきた海棲哺乳類のマナティーの棲息（せいそく）地と重なるという説もあり、興味深い。

新世紀ミュージアム

国内外の博物館・美術館におけるユニークな展示や革新的な活動を紹介し、その多様なあり方と将来を考える連載がスタート。初回は、カナダ歴史博物館の先住民展示に焦点を当ててみたい。

カナダ歴史博物館（Canadian Museum of History）／カナダ

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）　民博 学術資源研究開発センター

カナダ歴史博物館の全景

博物館と先住民とのかかわり

二〇一七年に建国一五〇周年を迎えるカナダは、ヨーロッパや中南米、アジア、アフリカを出身地とする多様な移民、そして先住民からなる多民族国家である。建国以来、英系と仏系のカナダ人が主流派であるが、多民族の共生を促進するため一九八八年に多文化主義を国是とした。

カナダには国名を冠する人権博物館、移民博物館、歴史博物館などといった六つの国立博物館がある。そのうちカナダ歴史博物館は首都オタワに隣接するガティノウ市にあり、毎年一二〇万人以上が来館する観光名所でもある。かつての名称は人類博物館であったが、一九八〇年代半ばにカナダ文明博物館へ、さらに二〇一三年末に現在の名称へと改名した。同館はカナダの歴史を展示するとともに、多様な国民からなる国家の一体性を示すことをミッションとしている。

人類博物館の時代より、カナダ先住民文化の紹介を展示の核としてきた。現在もその方針を継承しているが、二〇〇三年一月公開の先住民展示のときに大きな変化が見られた。そのきっかけは一九八八年のカルガリー冬季オリンピックの関連イベントとしてグレンボー博物館で開催された「精霊は歌う」展であった。その展示にはシェル石油社が資金提供をおこなったため、同社から環境破壊の被害を受けていた先住民ルビコン・クリーの人びとは、この展示およびオリンピックへのボイコット運動に立ち上がった。この事件が、カナダにおいて先住民と博物館との関係を見直すきっかけとなった。

スポーツ選手など著名な先住民の紹介展示

先住民展示の大転換

そのボイコット事件の後、カナダの博物館における先住民展示の方針は、非先住民による一方的な展示から先住民との協働展示もしくは先住民自身による展示へと変換した。当時のカナダ文明博物館もこの方針に基づいて先住民展示の新構築をおこなった。

ひとつの事例としてカナダ先住民ホール（展示場）を紹介する。そこでの展示は、構想から完成まで一〇年以上をかけて、同館の学芸員が各地の先住民族を代表した委員の意見を重んじ、彼らを補助するかたちで新構築を進めた。当時の委員であったクワクワカワクゥのグローリア・ウェブスターさんは、「先住民のもつユーモア」などを展示に盛り込むことを提案し、それが実現したことを喜んでいた。一方、学芸員のアンドレア・ラフォレさんは先住民文化を表象するために、何をどのように展示すべきかについて白熱した議論と調整の連続であったと振り返っている。さまざまな政治的・文化的利害にもかかわる展示内容について先住民族間の異なる意見の調整がもっとも頭を悩ますことであったようだ。

大平原地域の先住民文化の展示

先住民との協働展示

この先住民展示は「文化的多様性」「先住民の存在」「大地との結びつき」「異人の到来」の計四つのセクションから構成されている。導入部の「文化的多様性」ではさまざまな先住民族出身者の自己紹介映像を流しているほか、地名や民族名、言語、分布などをパネルで紹介している。「先住民の存在」では、カナダにおいて社会的に活躍した先住民の芸術家やスポーツ選手、大学教授らを写真や作品、パネルで紹介した後、カナダ先住民の多様な衣類や靴、神話などを通文化的に展示している。

「大地との結びつき」は、カナダの西部極北地域の捕鯨文化、大平原地域の野牛狩猟文化、大西洋沿岸の漁撈（ぎょろう）文化、東部森林地域の農耕文化の伝統的生活や交易活動を復元した地域別展示である。「異人の到来」は、先住民とヨーロッパ人との出会いから現在までの負の歴史と現状について先住民の視点を重んじながら展示している。また、現代のさまざまな政治運動やアート作品、先住民のユーモアも紹介され、明日への期待を読みとることができる。

現代の先住民アートの展示

カナダ歴史博物館の先住民展示は先住民と学芸員とが協議しながら創り上げた成果である。みんぱくの展示リニューアルでも現地社会からの助言をとり入れてきたものの、十分であるとは言いがたい。日本に住むわれわれはインターネットなどＩＴを活用し、海外の文化の担い手らと常に意見を交換しながら協働展示を目指す必要があると考える。

（掲載写真はすべて二〇一六年七月に撮影）

工芸館所蔵の「手芸的」なもの

木田拓也（きだ たくや）　東京国立近代美術館主任研究員

工芸は手芸や民芸とは一線を画しているが、どのような違いがあるのだろうか。工芸品の所蔵にかかわってきた筆者の視点から考えてみたい。そこから見える手芸特有の趣と可能性とは。

工芸館の「工芸」

現代「手芸」文化に関する研究会に参加するようになってから自分の身の回りの手芸について考えてみるようになった。わたしの場合は東京国立近代美術館の工芸館に勤務しているのだが、工芸館が収集や展示の対象としている工芸というのは、じつはかなり限定されている。明文化されているわけではないが、工芸館にとっての「工芸」を一言でいうならば、個人作家が自己表現として作った工芸作品ということになる。近代美術館という看板の下で工芸を扱う以上、個人作家によって作られたものであるということが大前提になるのだ。

そのため、工芸館のコレクションには民芸品は一点もない。おそらく一般的には、民芸も工芸も外見上は器物という形をしているため、同じようなものとみなされているかもしれない。だが、美的に、あるいは、造形的にいかに優れていようとも、個人作家によって作られたものでない以上、無名の職人によって作られた民芸品を工芸館のコレクションに入れるわけにはいかないというのが工芸館の学芸員の立場なのである。工芸館の学芸員としていわせてもらえば、工芸は、民芸や手芸などとは全然違うものなのだ。

シロウトによる工芸作品

工芸と手芸の相違点にはいろいろあるが、その作り手の属性という点でいえば、工芸はプロ、手芸はシロウトという区別が成立するように思われる。シロウトとは専門的な美術教育を受けていない人、作品でメシを食っているわけではない人のことといっていいだろう。シロウトの工芸作家というと矛盾するような響きがあるが、じつは工芸館のコレクションにはシロウトによって作られた作品がいくつも含まれている。

例えば、《志野茶碗　赤不動》はシロウトと自称しながら作陶にとり組んでいた川喜田半泥子（かわきたはんでいし）による有名な作品である。半泥子は今でも回顧展が繰り返し開催される人気作家だが、半泥子の本業はあくまで銀行経営であり、茶碗作りはいわば道楽のひとつにすぎなかった。半泥子のほかにも、山田山庵（さんあん）（銀行家）の茶碗や五味文郎（ごみふみお）（医師）の人形など、シロウトによる作品が工芸館のコレクションには含まれている。だが、工芸を本業としない作り手による作品だからといって、それらをおしなべて「手芸」とよぶのは違和感がある。

藤井達吉の手芸的なもの

大正期には生活と美術が一体となった暮らしのなかで、身の回りの工芸品の制作にとり組む作家があらわれ、明治期の技巧重視型の職人によって作られた工芸の対極にあるといっていいような、手仕事の味わいを押し出した趣味性の高い作品が作られるようになる。こうした時代のムードのなかで工芸のすそ野は大きく広がりを見せ、主婦層のあいだで手芸が流行し、手芸ブームといえる時代をむかえることになる。

藤井達吉（たつきち）は雑誌『主婦之友』誌上において手芸についての連載をするなど、大正期の手芸運動において指導者的な役割を果たした工芸家だった。工芸館には藤井が手芸に熱を上げていた大正期に作られた《電気スタンド》が収蔵されている。木の樹冠をシェードにしたランプといえばアメリカのティファニーの色ガラスの作品が有名で、藤井のこの作品もおそらくティファニーを念頭に制作したものと思われる。だがこの作品で注目されるのは木の幹の部分で、リベット留めで貼り合わせたことがあからさまに示され、稚拙といってもよさそうな手仕事の痕がそのまま残されている。しかも、木の根元のあたりには、まるでとっさの思いつきでもあるかのようにタンポポが彫りであらわされており、手芸的な雰囲気を感じさせる作品となっている。明治期の工芸とはまったく異質な趣をそなえた作品であり、旧来の職人的な世界から脱却して自由な表現世界を確立しようとしたときに、手芸的なものがもつ無邪気な破壊力に可能性が見出されたことをうかがわせる。

川喜田半泥子《志野茶碗　赤不動》 1949年
東京国立近代美術館
Photo: MOMAT/DNPartcom

藤井達吉『素人のための手芸図案の描き方』
主婦之友社　1926年
（『藤井達吉の全貌』展図録［キュレイターズ、2013年］）

藤井達吉《電気スタンド》 1916ー23年ごろ
東京国立近代美術館
Photo: MOMAT/DNPartcom

「フェイクニュース」としてのキラキラネーム

What's in a name?

小林 康正　京都文教大学教授

吹奏楽部での高校生たちの成長と葛藤をヴィヴィッドに描いた秀作『響け！　ユーフォニアム』にこんなシーンがある。入学して初のホームルーム。教師が川島緑輝の名前を読み上げようとして「りょくき？」と言い淀む。川島が「サファイアです!!」と叫んで赤面する場面だ。この後、緑輝は主人公たちに「みどりと呼んで」と頼む。

自分の名前のキラキラネームっぷりが嫌で、別名で呼んでもらうというエピソードには、ネタ元がある。『響け！～』の原作ができあがる少し前に「Ｙａｈｏｏ！知恵袋」に投稿された「私の名前は、キラキラネームです」がそれだ。一〇〇〇件を超すアンサーを得て、現在も閲覧ランキングの上位を占めている。親の理不尽さも加わって「キラキラネームは子どもに迷惑」という論調を勢いづけた。

現代の名前を代表するキラキラネームだが、どうも評判がよくない。特にネット上では散々な言われようだ。いわく就職に不利とか、救急救命での障害になるといった指弾だけでなく、親の人格否定はザラだ。

けれども、どんな名前がキラキラネームなのかというと判然としない。そもそもキラキラネームはどう定義されるのか。ウィキペディアは「一般常識から著しく外れているとされる珍しい名前に対する表現」とするが、名前についての「一般常識」がどんな内容で、「著しく」とはどの程度を指すのかが決まらない以上、その判定はやはり主観に任される。

もっともキラキラネームに否定的な意味合いが帯びている経緯は明らかである。こうした名前はすでに二〇〇〇年ごろには目立っていた。ただそのころはＤＱＮネームという別のことばがあてられていた。ところが、誹謗的なニュアンスをもつＤＱＮは、いわゆる「放送コード」の絡みから一般には使いづらかった。こうしたなか二〇〇九年の終わりごろにキラキラネームという上手い表現が発見されると、マスメディアはこれを使って一挙にこの現象を世間に伝えていく。キラキラはＤＱＮという世間の悪意を覆い隠す綺羅であった。

では、世間様はなぜそこまでキラキラネームを嫌うのだろうか。不謹慎ないい方になるが、公共性があるとはいえ、あくまで「他人」の子どもの名前である。他者の倫理に対して倫理を問われるようなやり方で非難をおこなう不寛容やそうした感情の増幅は、どこから来るのか。最近の他の社会現象の傾向を見た場合でも、重要な視点だと思う。

トランプ現象は、フェイクニュースに後押しされたといわれている。じつはキラキラネームの話題の多くがそれである。ネット関係者のあいだでは、キラキラネームは「鉄板ネタ」で、実在しない名前を並べてアクセスの誘因としたり、「私が光宙の父です（なんか文句あるか）」といった「釣り」が登場したりする。そして何より、このもっとも有名なキラキラネーム「光宙」も「ネットロア（ネット上の都市伝説）」なのである。「光宙と名前をつけるような親は教育し直さなければならない」という遊説がおこなわれたのが二〇二二年の総選挙。日本ではとっくにトランプ現象が起きていたのではないか。

月刊みんぱく 2017 4月号

編集後記

みんぱくは、今年大きな節目を迎える。

まず、この4月より吉田憲司教授が新館長に就任された。今号は巻頭インタビューとして、新館長のこれまでの研究から今後のみんぱくのあり方への期待までお話を伺った。日本に限らずアカデミズム、特に人文社会科学の制度的あり方が問われ、変化を余儀なくされているなか、大変心強いお言葉をいただけたと考えている。それに加えてプライベートな（仮面をはずした？）横顔をお見せするべく前編集長の協力のもと一問一答を付した。なお編集の都合上、写真の一部に小生の横顔まで写り込んでいるが、その点はご寛恕（かんじょ）を請いたい。

また、今年は開館40周年でもある。インタビューでも触れられているように、みんぱくでは、年度内にさまざまなイベントを計画している。本誌でも連動して40周年記念特集を組む予定である。吉田館長を迎えた新体制となったみんぱくとさまざまなイベントについて、引き続きご注目ください。（丹羽典生）

●表紙：ニャウの踊り手。死者の霊の化身とされる。カリザ村、ザンビア。1985年
撮影・吉田憲司

次号の予告

特集

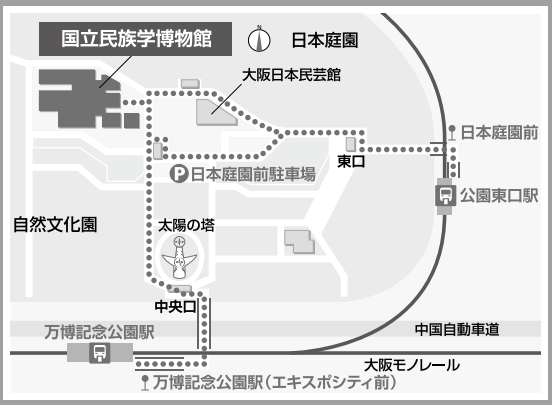
手話の世界をめぐる

月刊みんぱく 2017年4月号
第41巻第4号通巻第475号　2017年4月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　丹羽典生（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子
南真木人　山中由里子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
https://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
https://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

お気に入りのビーズがきっと見つかります ── 特別展「ビーズ」関連商品のご紹介

開催中の特別展「ビーズ──つなぐ・かざる・みせる」（6月6日まで）では、世界中のありとあらゆるビーズを見ることができます。色や形はもちろん、見慣れたガラスや石のほか、ダチョウの卵の殻やイルカ、カピバラの歯、さらにはオオスズメバチの頭など、素材にもさまざまなものがあります。

観覧後はミュージアム・ショップにもお立ち寄りください。本展の図録とあわせ、オリジナル商品、めずらしいビーズのアクセサリーなど、多数そろえています。注目していただきたいのは、2階で展示中のビーズアートのアーティストの方々の作品です。みなさまのお越しをお待ちしております。

カットソー
2,300円（全２種類）
色：ネイビー
サイズ：S, M, WM,L, WL

クリアファイル
（A4サイズ）
各330円（全３種類）

トートバッグ
1,000円（全２種類）
色：ネイビー

特別展図録
『ビーズ―つなぐ・かざる・みせる』
池谷和信 編
国立民族学博物館発行
全136ページオールカラー、B5変形判
1,100円

ビーズアーティストの
作品の一部を紹介します

① ビーズ織り ブローチ　6,000円
② ペーパービーズ　ブレスレット（パキスタン）　1,600円
③ ワイヤー・アンド・ビーズアート カエル ブローチ（ジンバブエ）
2,800円
④ ビーズフラワー ミニローズ アレンジキット
2,750円（全３種類）

カットソー、トートバッグにはメキシコの供物用容器のビース模様があしらわれています。

お問い合わせ先
国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112　FAX:06-6878-8421
e-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

※価格はすべて税抜きです。
※通信販売の場合、特別展会期中（6月6日まで）はカットソー、トートバッグ、クリアファイル（３枚セット）は送料無料でお届けいたします。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために──────会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00 ～ 17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

みんぱくフリーパスを有効期限内に再登録いただくと、登録期間がひと月延長になります。
お手続きの際、ぜひご利用ください！